

ノモンハン事件の終結

秦 郁 彦

欧州情勢と四国同盟論

四か月にわたってホロンバイルの草原を舞台に、日満軍とソ蒙軍の間で戦われたノモンハン事件は、一九三九年（昭和十四年）九月十五日に成立した日ソ停戦協定によって終結した。

八月末に第二十三師団が壊滅するという軍事的敗北に焦慮した関東軍は、なおも新鋭兵力を注ぎこむ弔い合戦的な決戦の準備を進めていた。しかし勝算は乏しいと判断した陸軍中央は、関東軍の主戦派幹部を入れ替え、あえてソ蒙側の主張をほぼ全面的に受け入れる覚悟で、事態の收拾を外務省の手に委ねる。独ソ不可侵条約から第二次大戦の勃発という国際環境の激動に、対応する自信を失ったからでもある。

ここで事件終結前後における内外の関連指標を、年表風に並べておこう（いずれも一九三九年）。

7月22日―日英間の有田・クレギー協定

8月20日―ソ連軍、ノモンハンで大攻勢開始（31日作戦終了）

8月23日―独ソ不可侵条約の締結

8月28日―平沼内閣総辞職（30日阿部内閣成立）

9月1日―ドイツのポーランド侵攻（27日ワルシャワ占領）

9月3日―英・仏、ドイツに宣戦布告（第二次世界大戦の開始）

9月9日―東郷駐ソ大使、停戦を正式提議

9月15日―モスクワでノモンハン事件の停戦協定成立

9月17日―ソ連軍、東部ポーランドへ進駐

9月―10月―ソ連、バルト三国を併合

11月30日―ソ連軍、フィンランドに侵入（ソ・フィン冬期戦争）

一連の指標を通観すると、ヒトラーのドイツが華々しい主役を演じているかのようだが、冷徹なリアリズム感覚で主導権を発揮して、一時的とはいえ最大の利得を得たのはソ連だったと見るのが適切だろう。

スターリンは実現寸前だったドイツを標的とする英仏ソ同盟の路線を一夜で独ソ提携に切りかえ、労せずしてポーランド、バルト三国、フィンランドなど東欧地域を支配圏に収めたばかりでなく、日独伊三国同盟を阻止して東西から挟撃される軍事的脅威を除去することができた。一石三鳥とも四鳥ともいえる外交的成功と評してよい。

スターリンの大戦略におけるノモンハン事件の位置づけについては、当時からさまざまな推論はあるが定説は必ずしも固まっていない。いずれにせよソ連が独ソ接近を見定めたうえで八月攻勢を発動し、しかもソが主張してきた国境線を越えての追撃をきびしく禁じたこと、ノモンハンの停戦を仕あげてから東部ポーランドへ進入するなど後顧の憂いを残さないタイミングで行動していたことははっきりしている。

こうした国際政治ゲームに不慣れな日本が割りこむ余地は乏しかった。年初から五相会議は、日独伊三国同盟をめぐる七十数回の「小田原評定」に明け暮れていた。最大の争点は対象をソ連だけにしぼるか、英仏米にも広げるかであったが、しびれを切らしたドイツは四月頃から同盟がぐずくならソ連に乗りかえると示唆するようになる。

ところがドイツ一辺倒で押しまくる陸軍の熱狂は冷める気配はなく、八月に入っても秩父宮大佐（大本営作戦課）が平沼首相の訪独案を持ちまわったり、板垣陸相が辞任して倒閣をはかるといふ風説が流れるほどだった。^①

寝耳に水の独ソ不可侵条約の衝撃で陸軍は「驚天狼狽し憤慨し怨恨するなど、とりどりの形相」（宇垣一成日記）を見せ、茫然自失の平沼内閣は、「欧州の天地は複雑怪奇」の名言を残し総辞職してしまう。もともと同盟反対の昭和天皇は「これで陸軍が目ざめることとなれば却て仕合せなるべし」^②と歓迎し、陸軍省のなかにも一年以上もめてきた国内の激烈な対立を解消する「きまり悪い話ではあるが……救いの手」^③だと受けとめる者もいた。

一方、ヒトラーの聖典「マインカンフ」が高唱した東方への膨張を阻まれたばかりか、対英仏戦の重荷を背負いこみ、三国同盟も一時流産という決算を招いたドイツも赤字収支と評せざるをえない。

その埋め合わせとして登場したのが、独ソ不可侵条約と三国同盟を結びつけ四国同盟に昇格させるリッベントロップ構想だった。この構想はリッベントロップ外相が独ソ不可侵条約締結のためモスクワへ飛ぶ前日に、リ外相から大

島駐独大使へ伝えられる。断わりなしの不可侵条約で面目を失い怒っていた大島を宥めるつもりか、外相は謝罪のついでに同盟を三国から四国へ発展させたいと説き、さらにノモンハン事件の仲介に立ちたいとも語った。⁽⁴⁾

ドイツが起源か否かは不明だが、前後して日本国内でも類似の着想が生まれ、夏の終り頃までにかなり広い範囲で支持者を集めていたようだ。⁽⁵⁾たとえば九月三日に有田外相が原田熊雄(西園寺元老の秘書)へ、三国同盟に失敗した陸軍の連中が「今度は独ソの不可侵条約に日本も加わって日独ソの軍事同盟をやってイギリスを叩こうという運動があり……それに陸軍の一部が共鳴してしきりにやっている」と伝えている。三宅正樹は海軍や外務省にも支持意見があり、阿部首相も同調していたようだとし、翌年秋に松岡外相の手で四国同盟への発展を前提とする三国同盟の締結に至る流れをたどっているが、⁽⁷⁾他ならぬ関東軍もいち早く便乗しようとした形跡がある。

それは「欧州情勢の変転に伴う時局処理対策」(8月27日)と題し参謀総長にあてた「関東軍上下一致」の意見書で、主旨説明のためわざわざ情報課長の磯村武亮大佐を上京させた。核心は「独逸、^{ドイツ}伊太利^{イタリア}を利用」して「国境をハルハ河の線」とする条件で「ソ連より休戦を提議せしむると共に、速に日ソ不可侵条約を締結し、更に進んで日独伊ソの対英同盟を結成」の部分にあった。

もともと次段で「軍は既定方針に基きノモンハン方面に於けるソ軍に痛撃を与う。之がため2D(第二師団)、7D、23Dを戦場に使用し……」⁽⁸⁾と一撃論を高唱したあと、「右根本方針を採用せられざる時は來春迄に在満兵力を動員増強し、独力ソ連の極東政策を早期に於て破摧す」と開き直っていた。

単なる思いつきか、外交交渉による停戦へ傾きはじめていた中央部への嫌がらせか、意見書の真意は判じかねるが、これ以上放任すれば制御不能になりかねないと危惧した参謀本部は、「勅命」という伝家の宝刀を抜いてでも関東軍

を押さえこもうと決意する。だが決着までには、なお少なからぬ曲折を経ねばならなかった。

せめぎあう関東軍と大本営

時期による変動はあるが、ノモンハン事件の処理をめぐる陸軍中央と関東軍との対立点は、ほぼ次の二点にしぼられよう。

1 国境の線引きと停戦条件

2 軍事的勝利の見通し

まず1について観察すると、当初から中央部はホロンバイル草原の一角で国境線を争うことに意義を認めていなかった。そして六月二十九日の大陸命第三二〇号は「隣国と主張を異にする地域……の兵力を以てする防衛は情況に依り行わざることを得」と婉曲な言いまわしながら、紛争地域（ハルハ河東岸）の放棄を示唆した。それに対し、血気にはやる関東軍が「北辺の些事は当軍に信頼し安心せられ度」と一蹴した経過は、すでに記述したので省略する。

その後、七月二十日に上京した磯谷軍参謀長は参謀本部会議の席で、橋本作戦部長がハルハ河の線を国境とする従来の主張を変更したいと言いつ出したことに食ってかかり、参謀次長と陸軍次官から撤回させる言質を取っている。

それでも冬期到来前に係争地から撤退し、好機をとらえ外交交渉による解決方針を示した「ノモンハン事件処理要綱」（7月20日付）を交付するが、一読した磯谷は「受付けず（案）」としてなら之を参考として研究すべしと言いつ鉛筆にて表紙に案の字を記入す。次長は……命令にはあらざるも総長の裁決は経たるものなれば……^⑨」という險悪なやりとりで終始した。

そもそも要綱が打ち出した外交交渉による解決方針は、板垣陸相の「熱心なる要求」を受け七月十八日の五相会議で議決されたもので、二十一日には外相から出先の東郷駐ソ大使へ「好機を見て局面收拾のイニシアチヴを執る」^⑩よう訓令を送った。

停戦条件は、両軍ともハルハ河を越えないとする第一案と、特定時刻における第一線の位置とする第二案があるとしている。最終的には第二の譲歩案で停戦を実現することになるのだが、陸軍の両トップ、外務省、五相会議が合意した、いわば国家意思を平然と無視する関東軍の「乱心」^⑪ぶりは変らない。

七月三十日には磯谷から参謀次長あてに、ソ連からの提議ならともかく我方より停戦を働きかけるのは「断じて採らざる所」で、情報によれば「ソ連中央部の態度は極めて強硬にして我方より停戦を提議するも受諾する模様なし。むしろ之を宣伝に逆用せらるる恐れ大」と追いつけを付けている。^⑫

この関東軍情報は、結果的に的中していた。停戦交渉を命じられた東郷大使は土居武官の進言もあり、戦勝の裏づけがなければ見込薄と判断して、モロトフ外相とは他の外交案件にからめる打診程度にとどめていた。^⑬

独ソ不可侵条約の成立で日本の立場はさらに弱化した^⑭が、八月二十三日にリッベントロップがノモンハン事件に關しドイツの仲介を申し出たところ「スターリンはこの申し出を拒絶はしなかったが、彼特有の無愛想な言い方で……時には彼らをきびしく取り扱わなければ」^⑮と答えている。二か月も準備を重ねたあとに発動した八月攻勢が快調に進行していた時だから、当然の反応だろう。

しばらく停滞していた日ソ外交交渉にソ連側が応じたのは、八月攻勢が終り、関東軍幹部が総入れ替えになった直後の九月九日であった。タフ・ネゴシエーターとして定評のあった東郷でも、敗戦の後仕末までは粘りようもなく、

ソ連側の停戦条件を丸呑みする以外にすべはなかった。

次に軍事的勝利の見通しをめぐる対立だが、東搜索隊が全滅した第一次ノモンハン事件（五月）、ハルハ河渡河作戦、安岡戦車団の東岸作戦、ひきつづく東岸の攻防、大砲兵戦（七月）、ソ軍の八月攻勢による第二十三師団の壊滅と、関東軍は連戦連敗は言いすぎとしても勝った戦闘は一度もなかったのに、負けてはいないと強弁し、次は勝つという強気の樂觀的姿勢を最後まで変えていない。

陸軍中央部は関東軍を通じ濾過された情報しか届かないせいもあって、戦況の実情をつかみかねていた。それでも七月三日のハルハ渡河戦に立ちあつた大本営の橋本作戦部長は「失敗するに違いない」¹⁴と予想し、帰京すると部下の井本少佐へ「ハルハ河左岸の戦況は結局退却なり」¹⁵との認識を語っていた。

しかし新京へ出張する作戦課の参謀たちは、出先で関東軍の樂觀論に同化されてしまい、橋本のような認識は定着しなかった。板垣陸相や稻田作戦課長などの幹部には、全面戦争の危険はないという前提で、「第二十三師団一つふいにすることも覚悟」¹⁶せねば関東軍の目は覚めないだろうと達観する気分も流れていたようだ。

ソ蒙軍の八月攻勢が開始されたあとも、軍中央部は意外なほど樂觀的で八月二十三日、慎重な情勢判断で定評のあつた第二部第五課（ロシア課）も「八月攻勢は我現兵力を以て之を破摧しう得るならん」¹⁷と觀察している。こうした勝利への幻想は八月末までつづく。

実際には二十四日から二十八日にかけて第二十三師団の戦線は崩壊状況にあり、係争地外へ追い出されてしまった第六軍は余勢を駆つたソ蒙軍が、後詰として配置についたばかりの第七師団主力の防御陣を突破するのではないかと危ぶんでいた。

二十七日夜からモホレヒ湖畔の戦闘司令所で戦況を注視していた浜田第六軍高級参謀は、第二十三師団の全面撤退を進言しようかと迷い、並んで立っていた矢野関東軍参謀副長の顔色を窺っていたが、矢野は終始無言なので断念したと回想する⁽¹⁸⁾。

結局、第六軍が「ノモンハン付近に兵力を集結し爾後の攻勢を準備せんとす」⁽¹⁹⁾（第六軍作命甲三六号）という、まわりくどい表現で撤退を命令したのは、最後まで抵抗をつづけていたバル西高地が落ち、その敗残兵たちが続々と到着しつつある二十九日朝であった。

これに対し関東軍のほうは一貫して強気の姿勢を変えず、「軍はノモンハン方面の敵盲進の機を促え……一大鉄槌を加うる」⁽²⁰⁾（8月26日）とか「冬季前速かに敵に徹底的打撃を与えること絶対に必要」⁽²¹⁾（同29日）だとして、第六軍に第二、第四師団、第一師団の半分、第八師団の一部や全満の速射砲を増加しての攻勢をもくろんでいた。

満州以外からの増援も欲しいところだったが、以前からの経緯もあり、「要求をなすことが如何にも不快」⁽²²⁾でも黙って我慢していれば中央のほうからよこすだろうと予想する。その読みは当たった。

少し前から増援を検討していた大本営は、第六軍への兵力集中で手薄になる他正面の防衛を補完する意図もあって、中国や内地から二個師団（第五、第十四）と野戦重砲二個連隊、速射砲九個中隊（54門）、兵站自動車二十二個中隊（約一一〇〇台）を増派したいと二十八日に上奏した翌日、関東軍へ内報したからである。

そのさい、関東軍の一撃論には「判断を一にする次第」だが、作戦の推移を看て（外交）交渉を開始したい、もし成立しなくても冬期前に作戦を終結させ、全兵力を撤去するためにも兵力の増派は必要だというまわりくどい論旨で説明している。昭和天皇が納得したかは疑わしいが、ほぼ同時に大本営作戦部でも方針を転換して、はやりたつ関東

軍を大陸命で押さえこもうと決意する。

攻勢中止は「大命です」

方針転換の引き金になったのは何だったのか。天皇の意向は別として、第一は現地の戦況が極度に悪化しているという決定的情報が入ったことであろう。情報源と日付は特定できないが、顔色を変えて飛んできたロシア班の甲谷悦雄少佐が軍務局の西浦中佐へ「ノモンハンは総崩れ⁽²³⁾」と伝えたのは、おそらくこの時の情景と思われる。

前後して稲田作戦課長は関東軍の寺田参謀から、攻勢作戦が冬までに終わらねば「來春は全軍動員、対ソ決戦を覚悟してくれ⁽²⁴⁾」という私信をもらう。しかもソ連軍が自ら主張する国境線内に留まって防御に転じ、線外へ進攻する気配のないことも知り、自主的に事件を終結させようと決意した。

稲田は橋本部長と協議してすぐにその主旨による大陸命を起案したが、温厚な中島参謀次長は「もうちょっとやわらかい表現はできんか。そのかわりにこの〈大陸命〉は自分が直接持つていって、その事情をよく話してこよう」と注文し修正したのは、次のような大陸命第三四三号だった。

命令

- 一、大本營の企図は……北辺の平静を維持するにあり 之が為「ノモンハン」方面に於ては勉めて作戰を拡大することなく速かに之が終結を策す。
- 二、関東軍司令官は「ノモンハン」方面に於て勉めて小なる兵力を以て持久を策すべし。
- 三、細項に關しては参謀總長をして指示せしむ。

昭和十四年八月三十日

奉勅伝宣 参謀総長 載仁親王

関東軍司令官植田謙吉殿

短かい命令文なのに二か所も「勉^{つと}めて」が入っていて、作戦をやめろというのか、小規模の戦闘は認めるのか、どっちつかずの悪文といえよう。しかも持参した中島と随行の高月保中佐は、関東軍の荒武者参謀たちを説得するどころか逆に丸めこまれ、「ミイラ取りがミイラ⁽²⁵⁾」になってしまう。

少し長くなるが、三十日夕方から息づまる空気の中で始まった関東軍の幹部会議で交わされた質疑の要奥を、関東軍機密作戦日誌と中島次長の回想から復元⁽²⁶⁾してみよう。

植田軍司令官 大命は拝受しました。命令の第三項にある参謀総長の指示事項はありませんか。

中島参謀次長 ありません。

加藤情報参謀（敵情を説明）

寺田作戦課長（攻撃計画を説明）

中島 成功する確信はあるか。

寺田 確信がございません。三個師団で連続夜襲をかけます。

高月中佐 第四師団を加えずにやることはできませんか。

寺田 絶対に必要。できれば大本営が約束した第五師団も加え、至短期間に目的を達し引きあげたい。ハルハ河を越えるつもりはない。

磯谷参謀長 第四師団を加えてよろしいのですね。

中島 よろしゅうございます。

磯谷 はつきりわかりました。

植田 大命に勉めて小なる兵力を以て持久すべしとあるが、関東軍の攻撃計画を容認するのか。

中島 持久とは戦略的持久の意味で、その範囲内で戦術的攻勢をとることは勿論妨げません。ハルハ河を一時越境する作戦もありましょう（図上で渡河方面を指す）。

中島 相協力して大にやりましょう。追加要求があったら、遠慮なく言ってくれ。

寺田 重砲、戦車の肉薄攻撃用資材を――

少し補足すると、冒頭で軍司令官が聞いた参謀総長指示（大陸指）を、実は中島次長は携行していたのである。大陸命三四三号と「第四師団の戦場使用は中止するものとす」という大陸指五三〇号は、天皇の允裁手続きが発発までに間に合わず新京到着時に大本営から届いたものだが、中島が「ありません」と否定した理由は不明だ。

出先との融和を重視していた中島が、あえて握りつぶしたのかもしれないが、質疑応答を見ると、参謀たちは幕僚連絡でか大陸指の内容をすでに承知していたとは思えず、食いさがって中島に撤回させている。

しかも関東軍側がハルハ河を越えぬと述べているのに、渡河の地桌まで助言しているのだから、中島は携行した大陸命の主旨を否定するために出かけたと思われてもしかたがあるまい。

こうして次長の「説得」に成功した関東軍側が喜んだのは当然だろう。辻参謀は「三十日夜官邸の招宴に一同大いに打解けて」語りあい、「これなら今度の攻勢は必ず成功するぞ。必勝を信ずる空気に満ちた」⁽²⁷⁾と書いている。

一方、中島次長の軟化を心配していた稲田作戦課長は新京での応答ぶりを知り、急いで次の手段を講じた。大本営研究班の文書は、九月二日の項に「次長、第一部長、第二部長、第二課長及（秩父宮）殿下居残り……本件の自主的終結を決意せり」⁽²⁸⁾と記録している。

第二課の稲田課長によれば、「大陸命第三四九号」を用意しておいて「帰着されたばかりの次長にさつと出した……すでに橋本部長までのハンコが押してある。目を通した中島さんはいかにも困ったなという表情……」⁽²⁹⁾「それでよろしいですか、とこういいました。中島さんは、うん結構だとおっしゃいました」という一方的に近い強要だったらしい。

「次長は勿論ロボットに等し」⁽³⁰⁾（今岡豊）だったにせよ、中島にもそれなりの言い分がないではなかった。新京へ行くまで、第二十三師団はまだ健在で苦闘中らしいと思いきんでいたとか、攻勢計画は装備、補給の裏付けがあるのか不安をぬぐえなかったとか、帰路に立ち寄った福岡会議（兵力転用の打合せ）で、支那派遣軍の参謀たちから攻勢中止を進言され、認識を改めたというのである。⁽³¹⁾

問題の大陸命第三四九号の要旨は次の通り。

一、情勢に鑑み^{かんが}大本営は自今「ノモンハン」方面国境事件の自主的終結を企図す

二、関東軍司令官は「ノモンハン」方面に於ける攻勢作戦を中止すべし

次にはこの大命を誰が携行するかだったが、橋本は「電報だけで十分」と言い、稲田は「わたしが行けば辻君あたりは斬りつけるかも」と譲りあっているようすを見た中島が、「おれがもう一度行つてこよう³²」と言いだす。

九月四日、再び新京へ飛來した中島は大陸命を伝達したあと、わざわざ携行した「大陸命第三四九号に基き隠忍自重、他日の雪辱を期し克く上下を抑制して、時局の收拾に善処せんことを切望す」という「参謀総長の御言葉」を渡している。³³

大陸命をつきつけられて逆上し、面従腹背の暴発的行動に走りかねない関東軍を慰撫するつもりだったのか。その心配は的中した。植田軍司令官は「大命は絶対にして攻勢企図は中止せざるを得ないが、戦場掃除による屍体、兵器の奪還まで中止せよとの大御心ではないはずだ」と抗弁した。

大本営から攻勢を承認されたと思ひこみ「今次会戦は……実に日蘇の一大決戦……以て蘇蒙軍を撃滅し皇軍の威武を中外に宣揚せん」（九月二日）との軍司令官訓示を全部隊へ発出したばかりの関東軍幹部たちはいきりたつ。

戦場掃除の名目であくまで攻勢発動に固執したが、前回にこりてか中島は何を言われても「大命です」と拒みつづけた。そして軍司令官以下の全幕僚を解任せよとの威迫にも「上司へ伝えます」と答えるのみ、半日の滞在で東京へ引きあげた。一連のやりとりを、半藤一利は「大命は尊重するのも、無視することもまた大御心にそうことになるという詭弁」だと評す。

その後も両者の間では売り言葉に買い言葉風の激しい応酬が電報で交わされる。なかでも

「一、貴官意見具申を採用せざる件に関しては本六日朝謹んで上奏せり

二、直に大陸命三四九号の実行に移らるべきものと確信す

三、右、実行に關し貴官の処置を速に報告するを要す

参謀総長」（参電三三〇号電）

の第三項を読んだ辻は、「之が同じ軍服を着たものの道かと憤泣した³³⁾」と大げさに書いている。同日畑陸軍大臣からも、「此の際大命を奉公の上責任を取らるるが即ち臣節を全うせらるる所以と信ず。本日勅裁を経たり³⁴⁾」という電文が送られた。全体に流れる冷厳なトーンは、一週間前まで侍従武官長として、関東軍の横暴ぶりに手を焼いた体験の影響かもしれない。

ノモンハン事件の責任を問う関東軍の人事異動は七日正式に発令された

軍司令官 植田大将↓梅津美治郎中将

参謀長 磯谷廉介中将↓飯村穰中将

参謀副長 矢野少将↓遠藤三郎少将

高級参謀 寺田大佐↓有末次大佐^{やじろ}

服部、辻、島貫各参謀は転補、植田、磯谷は予備役へ、荻洲第六軍司令官、小松原第二十三師団長、畑砲兵団長も少しおかれて予備役に編入された。

大本営側も無傷ではすまなかった。中島参謀次長、橋本第一部長は予備役編入、稻田第二課長は転補となった。ケ

ンカ両成敗に近い人事処置とも評せよう。

陣取りの小競り合い

ノモンハン戦史の諸著作を見ると、ロシア側は八月攻勢が一段落した八月末、日本側は九月三日の大陸命をめぐる騒動までで観察と記述を打ち切っている例が多い。戦史叢書やジュコフ、シュテルン報告書も例外ではない。たしかに九月十五日の停戦に至る十数日、対峙する両軍の間に大規模な戦闘は起きておらず、概して戦線は平穏だったと言えるが、伏流の次元で観察すると日ソ間にはかなりの落差があった。

ソ蒙軍はモスクワのきびしい指令で、彼らが国境と認定してきた線を守り防御陣地の強化に専念していたのに対し、日満軍は九月中旬の発動をめざす大規模な攻勢準備を進めていた。その過程で不慣れだが戦意の高い増援部隊が、攻勢のために便利な要拠を確保する「陣取り」的行動が散発する。双方の斥候や偵察隊が衝突して小競合をひきおこす事例もあった。

九月六日関東軍司令部は第六軍司令官に対し、三日の大陸命を伝達する形式で攻勢作戦の中止を命じたが、同時に「第六軍は概ね既定計画集中末期の態勢に在りて敵を監視すべし。爾後の行動に関しては別命す」（関作命甲一七八号）とか「本職亦断腸の思……自重せらるると共に別命ある迄万一に應ずる作戦準備は依然継続」³⁵（9月7日発電）せられたいと、思わせぶりの指示を与えていた。傍桌部分は、攻勢をあきらめきれぬ参謀たちの執念を反映したものだろう。その頃、第六軍に増加された諸部隊の多くは全満の各地から指定されたノモンハン周辺の展開地へ向かいつつあった。そして大命発令後も引き返すことなく前進をつづけた。別命（攻勢発起）を予期しての処置だろうが、一時は意気消沈しかけていた第六軍も、こうした関東軍のテコ入れで戦意を盛り返しつつあった。何しろ増援を約束された兵

力はいずれも精銳の第二、第四師団、第一師団の半部、第八師団の一部等のほか重砲、山砲、速射砲、兵站自動車隊など約四万、手持ちを加えると六万人に近い大軍にふくれあがったからである。しかも頼まれてもないのに、大本営は主として中国戦線から第五師団、第十四師団、野重二個連隊などの追加投入を指令していたから、⁽³⁶⁾これらが到着すれば総兵力は十万に近い規模に達したろう。

とくに大本営を説得したと信じこんだ島貫参謀が九月三日に攻勢確定を報じると、大兵をもらった荻洲軍司令官の気分は高揚した。

「(荻洲) 中將の得意や知るべく、其喜悅は例うるに物なく大気焰なり」⁽³⁷⁾と畑砲兵団長は觀察している。そして荻洲は五日に部下の指揮官たちを集めて「速に敵に鉄槌的一撃を加え……国境鼠賊掃滅の蠢動を一挙に封殺し……皇軍の威武を宣揚し以て大元帥陛下の信綺に応え——」⁽³⁸⁾と檄を飛ばし、「会戦指導の腹案」を示達した。

攻勢作戦の中止を命じる六日の関作命を受けた当直の本郷参謀は、一読した藤本参謀長が「何だこんなもの」とポケットにねじこみ、「当分のうちこの電報は絶対⁽³⁹⁾に他に洩らしてはならぬ」と厳命した情景を回想しているが、実際にこの関作命が指揮下部隊に伝わることはなかった。

それどころか第六軍司令官名で、「軍は既定計画に基き作戦準備の完成」を進め「断じて敵をしてハルハ河右岸地区に停止せしむべからず」⁽⁴⁰⁾と返電している。この電報は第六軍司令部に派遣されていた島貫参謀の起案だから、大陸命を守る気のない関東軍強硬派が第六軍を利用した「蠢動」と見てよいだろう。

彼らの挑発的策動で証跡が残っているのは九月七日と八日、片山支隊の歩16連隊(長は宮崎繁三郎大佐)による九九七高地(エルス山)の争奪戦、もうひとつは九月十一日の第三独立守備隊深野大隊等によるハルハ山(モンゴル側

の呼称はマナ山）周辺の戦闘である。

第二師団主力が八月二十六日の動員でハイラルを経て將軍廟へ向ったのに対し、片山支隊（第二師団の歩16、30連隊と砲兵一大隊を基幹とし、第15旅団長片山省太郎少将が指揮）は、南まわりで白温線の終点であるハロンアルシャンから徒歩でハンダガヤを経て、その北方ドロト湖地区へ八月末に進出した。

到着時は第六軍から積極行動を禁じられていたが、その後のあわただしい朝令暮改ぶりを関東軍の動向（既出）と並べて眺めよう。

（9月2日）――関東軍司令官の訓示

9月3日――島貫参謀、片山支隊へ来て積極行動への転換を伝達

9月4日――片山支隊長→宮崎連隊長、6日夜に九九七高地を攻撃するよう指示

（9月6日）――関東軍（辻起案）→第六軍、大命による攻勢作戦の中止を命令

9月6日――午後、第六軍→片山支隊長、夜襲の中止を指示

（9月7日）――関東軍司令官（辻起案）→第六軍司令官、万一に應ずる作戦準備の継続と軽拳を戒め、士気の維持を強調。

9月7日――午前、第六軍参謀（島貫か？）が片山支隊へ来て、7日夜に夜襲を決行せよと連絡。

宮崎連隊長が「軍の無方針なることに痛嘆を感じた」⁽⁴¹⁾のはわりもないが、それなりの理由はあつたわけだ。

ところで夜襲の目標となった九九七高地を守備していたのはモンゴル騎兵23連隊（ドウガルジャブ）だったが、夜襲戦術を得意としていた宮崎連隊は暗夜の白兵戦で難なく奪取した。そして翌日朝から西方へ追撃に移ったが戦車、装

甲車を伴うソ蒙軍に反撃され、激烈な攻防戦となる。戦車を持たぬ宮崎連隊は苦戦に陥ったが、支隊から増援部隊が到着したこともあり、日没を迎えて、ソ蒙軍は後退した。

ソ蒙側の言い分は少しがう。参戦したのは第六戦車旅団の戦車大隊（五〇両）、歩八〇、六〇三連隊の一部、砲兵隊、モンゴルの騎兵二個中隊と第六国境警備隊で、「日本軍を国境外に追い払った」⁽⁴²⁾と言い分は違うが、実態は引き分け、物別れに近かったのではあるまいか。

宮崎連隊は戦果を戦車八両、遺棄死体七〇人と報告したが、戦死一八三人、戦傷九九名という犠牲を払い、とくに大隊長をふくむ一〇人の将校を失ったことは、第六軍司令部に衝撃を与えた。それでも宮崎が石工出身の兵に進出線を示す道標を埋めこんでおいたため、のちに国境画定交渉で日本側の主張が通る一因となり、「ノモンハン戦で唯一不敗の連隊長」という宮崎の名声は確立した観がある。

次にとりあげる深野大隊の戦闘も、やはり関東軍と第六軍が大命騒動のドサクサにまぎれて仕掛けたものだが、宮崎連隊の攻勢に比べると胸を張れる言い訳の材料がないでもなかった。

攻勢作戦の中止を命じた九月三日の大陸命三四九号の第二項後半に「兵力をハルハ河右岸地区繫争地域（「ハンダガヤ」付近以東を除く）外に適宜離隔位置せしむべし」というカッコ内の例外規定が入っており、その例外を援用できたからである。

その頃、ハルハ河上流に近いハロンアルシャンからハンダガヤを経てハイラル（または將軍廟）に至る鉄道の延長工事が計画され、測量工事が始まっていた。それを護衛する名目で索倫にいた第三独立守備隊の深野大隊（独守歩第十六大隊）へ出動命令が出たのは八月十八日である。

八月下旬からは南まわりの増援部隊が次々に到着、アルシャンから將軍廟に至る補給線を確保する任務をもらった後藤支隊（歩兵第一連隊等、支隊長は後藤光藏大佐）、独立守備歩兵第十五、十六大隊等がアルシャン西北方のハルハ河三角地帯へ展開した。

ソ蒙軍との小競り合いは九月三日頃から断続していたが、七日頃に辻参謀が後藤支隊を訪れたのが、目撃されている。それ以上は確認できないが、九月十一日、深野大隊（兵力四百）と独守歩第十五大隊の黒崎中隊はハルハ山に進攻、吹雪のなかの白兵戦のち奪取に成功する。前日から守備についたばかりのモンゴル騎兵22連隊（兵力六百）は、潰乱状態となり、兵員二三名、砲四門、数十頭の軍馬を捨てハルハの対岸へ逃げ帰り、責任を問われた連隊長は処刑された。日本軍の戦死者は九名にすぎず、ノモンハン戦全体を通じ唯一の快勝と言えよう。ジューコフ司令部は、モンゴル軍の要望を入れ奪還計画の準備を進めたが十五日に停戦となり、その機会を失った。

国境画定にさいし、満州国とモンゴルの国境は停戦時における両軍の停止位置で決まったため、モンゴルは南部のエルス山とマナ山の周辺で北部の係争地（ホルステン川周辺）とほぼ同じ面積（約五〇〇平方キロ）を失なう。モンゴルは現在でも「固有の領土がわが国の外側（注…中国）に残された」⁴³不満をかこっているという。

ほかに、いづれが仕掛けたか判然としない小競り合いが起きているが省略して、幻に終わったため判然としていない第六軍の攻撃構想を見直しておきたい。

第六軍の新攻勢構想

第六軍による攻勢計画の基本構想を練ったのは辻参謀を中心とする関東軍作戦課で、具体案を作成し、指揮下の各兵团へ伝達したのは第六軍司令部であった。「従来のような原則的戦法では、到底勝つ見込みはない」と痛感した辻

は「歴戦の体験から編み出された戦法」なるものを次のように記述している。⁽⁴⁵⁾

第一日の夕方から攻撃を開始し……夜は攻撃前進し、昼は防御する戦法を四日に亘り連続し、第五、第六日は準備を整え第六日夜、夜襲によって敵主陣地を突破しようとする考案であつた。

一晚の攻撃前進する距離が五百米から千米までであり……旧式装備の軍で、戦車と飛行機と重砲の優勢な敵に対して、採るべきはただ夜間の攻撃だけである。この案を第六軍に示し、各師団に訓練と準備を命じた。

数個師団による連続一週間の夜襲という、日本はもとより世界戦史にも未聞の新戦法だが、辻に「名案ではなく、これ以外に勝味はない」と断言されて、異議を唱える声は聞かれなかった。

既述のように八月三十日、中島参謀次長を迎えて寺田参謀はこの辻構想を紹介し、九月十日に発動、下旬に終了、十月中旬までに撤収、主攻はハンダガヤ方面と説明している。中島はすっかり引きこまれ、ハルハ河渡河も必要だろうと地図上に渡河方面を指したほどであつた。この「助言」もあつてか第六軍の攻撃計画は手直しされ、第二師団によるハルハ河渡河作戦が入り、主攻は北方の將軍廟―ノモンハン正面へ変更された。

主攻正面をなぜ変えたのか理由は明確でない。原駐地のチャムスからハンダガヤへ向かう途中で、展開地を將軍廟東南方へ変更された沢田第四師団長は、九月三日に主攻はハンダガヤ正面にすべきだとの意見書を第六軍へ届けている。だが五日の兵団長会議で荻洲軍司令官から飲料水の補給に難があるので北方（右翼）主攻へ変えたと釈明され、「これを諒とした」⁽⁴⁶⁾と日記に書きとめている。

たしかに六月から八月にかけて將軍廟を本拠に石井四郎軍医大佐がひきいる防疫給水部隊は、五〇台の浄水車、一千個以上のドラム罐を使いボイル湖とホルステン川を水源として、一日当り一五〇二〇万石の浄水を供給した実績があつた。

給水ばかりではない。新たな主攻正面は、ソ蒙軍がすでに「交通壕を有する二〇三線の壕、ピアノ線をふくむ二〇三線の鉄条網を張つた」⁴⁷強固な防御陣地を構築していた。その突破は容易ではないとはいえ、第二十三師団が四か月にわたり苦闘したなじみ深い戦域でもあつたし、第七師団も滞陣二週間を超えていた。一個師団で支えた狭い戦場に三個師団を並べれば、突破可能と読んでの転換だったのかもしれない。

左翼のハンダガヤ―アルシャン方面は片山支隊（攻撃発動時には第二師団主力へ合流予定）と後藤支隊、第三、第五独立守備隊、満軍の石蘭、鈴木支隊で牽制と補給ルートの確保に当ることとなったが、戦況によつては最左翼に第五師団を投入し、ハルハ河上流を渡河してジューコフ司令部を南北から挟撃する案も検討されたようだ。

ここで九月五日に第六軍が各兵団長へ伝達した「次期攻勢作戦指導計画」⁴⁸の要旨をかかげておく（図1参照）。

方針

軍は一部を以てホルステン河左岸（南岸）の敵を第七師団正面及東方地区に拘束し、主力をホルステン河右岸に転用し敵の左翼を破摧し之を包圍席卷してハルハ河畔に捕捉撃滅す。攻撃開始の時期は十日前後とす。

指導要領

一、片山支隊を第二師団に戻し（著者注―実行せず）、後藤支隊、伊東支隊（四ツ谷支隊、長谷部支隊をふくむ）は、正

面の敵を陽動により抑留牽制。

- 二、23 D（第二十三師団）はホルステン川に沿って川又に向い攻撃。
- 三、7 Dは23 Dの右に連繋し、ウズル水付近よりイリン台の敵を川又北方地区に向い攻撃。
- 四、2 Dは7 Dの右に連繋し、フイ高地方向に進撃し敵の左側背を包囲攻撃す。
- 五、4 D主力は2 Dの右翼に連係し敵の左側背に楔入突進し敵の退路を遮断す。
- 六、右の構想成立の基礎は我が企図の秘匿と攻勢準備の周到に存す。

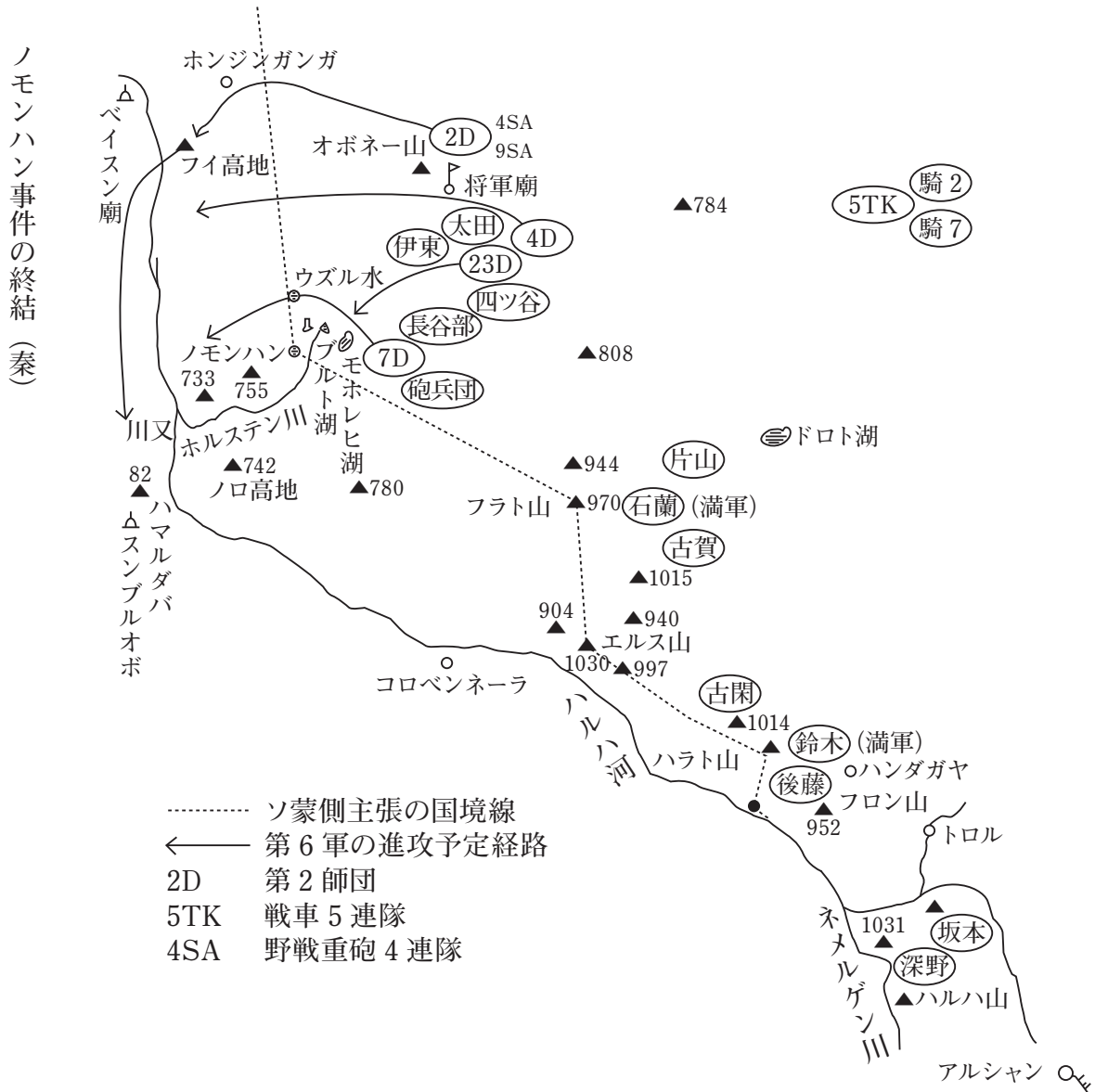
右のうち23 Dは戦力が激減していたため当初は除外されていたが、復仇の念に燃える小松原師団長の熱望で道案内役を兼ね攻勢に参加することとなった。

五日の指導計画にその後加えられた修正点は、原文が見つからないのでやや明確を欠くが、第二師団の機密作戦日誌に添付されている「第二師団攻撃計画案」（9月10日）から察すると、攻勢師団の配列順が変り、ハルハ渡河作戦が加わったようだ。

すなわち北から4 D、2 D、7 D、23 Dの配列順だったのを、4 Dと2 D、7 Dと23 Dが入れ替り、2 D、4 D、23 D、7 Dの順に変わっているのである。理由は不明だが、前者は迂回距離が長く、渡河成功後に南下してジュコフ司令部が位置するハマルダバ（スンプルオボ）周辺まで進撃する任務には、最精鋭の定評がある2 Dをあてたいと考え直したのではあるまいか。

ついでに第二師団のX日（攻勢発動日）から起算した進撃日程を見ると、次のように設定されている。

図1 停戦直前の第6軍配置



X 12日……全師団が將軍廟付近に集結。

X 日薄暮……將軍廟付近から出動前進。

X 11日夜……夜襲でフイ高地一帯を占領、一部はハルハ河畔まで行き渡河準備。

X 12日夜……タギ湖西側より漕渡河と架橋により、白銀查干（バインツァガン）高地、ベイスン廟を確保。

X 13日……渡河した有力な砲兵（砲弾は一〇基数）の支援下に、昼間または夜襲でスンプルオボ付近まで進出。

X 14日以降……爾後の行動は状況により決す。

右の日程表を検分すると、第二十三師団による七月三日の渡河攻撃に酷似していることがわかる。主攻正面が途中で南方から北方へ変ったのもそうだが、着想が同じ辻参謀だから当然と言えるのかもしれない。それでは前回の教訓が生かされているかとなると、いささか心細い。

敵中を潜行して九月十三日ハルハ河に到達した歩4の石井正少尉ら八人の偵察班は、「最良と判定した渡河点（水）深1〜2m、二条の水流はそれぞれ幅50m、敵の警戒希薄⁴⁹」との報告書を十五日に師団司令部へ提出しているから、前回と同様の奇襲渡河は可能かもしれない。

しかし渡河部隊が携行する糧食は各自が甲（コメ）一日分、乙（乾パン）二日分にすぎず、あとは將軍廟から握り飯を運ぶという予定だったから、爆撃で橋を破壊されたら立往生になりかねない。

より深刻な懸念はホルステン川北側のソ軍縦深陣地帯を、4Dと7Dが突破して川又まで到達しうるかであった。第六軍が「秘策」の触れこみで考案したのは、夜暗にまぎれ敵中深く潜行して戦車、火砲を破壊する特別挺身隊（潜

入破壊班)の編成であった。

三〇五人が一組で一〇〇組を作り、手榴弾、吸着爆薬、戦車地雷を結束して戦車のキャタピラや砲門に押しこむのが狙いだが、部隊によつては「一人一門必勝必死」(砲兵団)のスローガンを与えたり、「雷管を釘で刺して自爆せよ」(工兵第2連隊)のような指示も見かける。第六軍の「戦闘教令」(9月6日)は夜襲の技法を解説したあと、「接近は絶対静粛、敵の哨兵に誰何されたら『ダヴァリシチ』(同志だ)と答えよ」という微笑ましい知恵も授けていた。

停戦協定の成立

それでは攻勢計画を実行していたら、どんな様相を呈しただろうか。計画の難点はいくつもあるが、書きだせば十数ページにもなろうかという種々雑多な増援の諸隊は固有編制を崩して全満各地から抜き集めたものが多く、その運用は至難の課題だった。

八〇〇km離れた北満の孫呉からかけつけた第一師団の例を見ると、まず七月十七日に各連隊(歩1、3、49、57連隊)から抽出した速射砲四個中隊が、第二十三師団へ増援される。

ついで八月二十六日と二十八日、二次に分けた応急派兵が発令された。第一次は太田少将がひきいる混成第二旅団(歩3の二大隊と歩57の一大隊、野砲一大隊、輜重兵連隊等)、第二次は後藤歩1連隊長が指揮する後藤支隊(歩1の二大隊と歩49の一大隊、野砲混成大隊、工兵連隊主力等)である。

太田旅団はハイラルから將軍廟までの二二〇kmを一週間かけて徒歩で行軍したが、九月十日に着いた時は半数近くが落伍し「疲労の極に達して果してこれからの戦闘に耐えられるかと懸念⁵⁰」された。

後藤支隊は南まわりの鉄道輸送で九月五日アルシャン着、直ちに戦闘中のハルハ山地区へ布陣し、十一日の激戦

表 1 第 6 軍に増派された主要部隊

(1939年 9 月15日現在)

部隊名	主要構成 (連隊)	指揮官	兵力	原駐地	配備状況
第 1 師団主力	歩 1、3、49、57等	岡部直三郎中将		孫 呉	
後 藤 支 隊	歩 2 大、砲 1 個大等	後藤 光蔵大佐	2,232		8/28動員、9/7アル シャン、9/13ハンダ ガヤ
太 田 支 隊	歩 3 大、砲 1 個大等	太田 米雄少将	2,326		8/26動員、9/10将 軍廟
第 2 師団主力	歩 4、29、野砲第 2 連隊	安井 藤治中将	6,181	東 満	8/26動員、8/31～ 9/7將軍廟
片 山 支 隊	歩16、30、砲 1 個大	片山省太郎少将	4,518		8/26動員、9/3ドロ ト湖畔
第 4 師 団	歩 8、61、70、野砲 第 4 連隊	沢田 茂中将	9,841	チャムス	8/28動員、9/8將軍 廟東南
古 閑 支 隊	歩 8、砲 1 個大	古閑 健少将			9/13編成・フロン山
第 5 師 団	歩11、21、41、42	今村 均中将		華 北	8/29動員、9/10～ 9/18満州展開
第 7 師団主力	歩25、26、27、28	国崎 登中将	10,613	チチハル	8/26ノモンハン展開
第 8 師団(一部)	歩32、砲 1 個大等	堤 不夾貴少将		東 満	9/3動員・ハイラルへ
第 14 師 団	歩2、15、50、59	井関 隆昌中将		華 北	9/5動員、満州へ 移動せず
八 国 伊 東 支 隊	歩 1 個大、砲 1 個大	伊東 武夫大佐	1,926	ハイラル	8/24動員
3 独守歩15大隊		坂本 弥平中佐			アルシャンへ
3 独守歩16大隊		深野時之助中佐	443	索 倫	8/18動員、8/26ア ルシャンへ

部隊名	主要構成（連隊）	指揮官	兵力	原駐地	配備状況
5 独守歩29大隊	騎 4、23	古賀 竜一中佐	43両	東 満	8/23動員、8/31ハンダガヤ
騎 兵 3 旅 団		木下 勇少将			9/3動員、9/8ジャライノールへ
戦 車 5 連 隊		田畑与三郎大佐			9/1動員、9/10將軍廟へ
野 重 4 連 隊		白石 久康大佐			8/26動員、9/4將軍廟へ
野 重 9 連 隊		井原潤次郎大佐			8/26動員、9/4將軍廟
野 重 10 連 隊		竹田 豊吉大佐	631	華 中	9/5動員、満州へ移動せず
独立山砲 4 連隊				綏 陽	待機のみ
独立山砲12連隊				東 満	9/1動員、9/4將軍廟へ
独立工兵22連隊				フラルキ	9/3動員・ハイラルへ

注(1) 8月20日以前に参戦し、9月15日にも第6軍に属していた主要部隊としては、第23師団、森田支隊（第7師団）、長谷部支隊（第8国境守備隊）、四ツ谷支隊（第1独立守備隊の歩第6大隊）、歩26連隊（第7師団）、野戦重砲3旅団があり、いずれも損耗大。他に独立野砲1連隊、迫撃2連隊、工兵第24連隊等があった。

(2) 後方部隊、満州国軍は省略した。

(3) 集中末期の第6軍兵力として、「ノモンハン事件研究報告」（昭15.1.10）に、歩兵53大隊、戦車60両、速射砲230門、重砲49門、軽砲238門という数字が掲記されている。

（前述）に参加したのちハンダガヤへ移動中に停戦の日を迎えている。

それでも動員された兵数は師団定員の半ばに達しない五千人で、うち死傷者は一七九人、その九割以上が速射砲隊だから、参戦部隊のなかでは軽微と言えよう。それでも孫呉に残留した岡部直三郎師団長は速射砲隊の消息が気にかかり、参謀を第六軍に派遣して調べさせたが、停戦の日までに何の情報も得られなかったと書いている。⁵¹

指揮下の部隊でも所在の確認がやつとで、トラックや食糧の手配まではつきかね、大兵站部となった將軍廟はごつたがえす。しかし「依然として重火器、機械化部隊は無く、人と銃弾の寄せ集め」⁵²（島田英常）というのが実情だった。

集中末期の第六軍増加部隊は表1の通りだが、兵員数はソ連軍を上まわり、砲兵力もほぼ均等なのに最大の弱点は、六八〇両と推定されたソ軍の戦車・装甲車に対し、日本軍の戦車は六〇両にすぎないという圧倒的格差であったろう。

さすがに弱音を公言する指揮官はいなかったが、本音は「士気なんとなく上らず」（沢田第四師団長）、「攻勢の意気尚十分ならず」（畑砲兵団長）どころか「実行していたならば、またたく間に潰滅する悲運に逢着する公算が極めて大きかった」⁵³（大本営作戦課の井本少佐）といえそうである。

こうした空気が影響したのか、攻勢発動の予定日は九月十日、十二日、十四日と順延され、訓練中の兵士の間では二十日、二十三日説も流れた。

そこへ九月十一日、矢野に代った関東軍の新参謀副長遠藤三郎少将が寺田の後任になった有末次大佐とともに第六軍司令部へ現われ、「1. ノモンハン付近第六軍主力は逐次現態勢を撤し原駐地に帰還せしむ。撤退開始の時期は九月二十日と予定す」⁵⁴ 2. ハンダガヤ付近には所要の兵力を残置し該地付近を確保且、予定の鉄道建設を遂行するに努む。冬期残置兵力は温泉（アルシャン）以西混成約一旅団とす」との関東軍命令を伝達した。

モスクワで進行しつつあった停戦交渉の如何にかかわらず、攻勢を中止するという梅津新関東軍司令官の決断であつたが、荻洲軍司令官は「残念である」と声涙共に下る姿⁽⁵⁵⁾ながら「心の中ではホッとされたことは十分察知しました」と遠藤は観察している。そのモスクワ交渉は九月十四日、東郷大使の申入れでモロトフ外相との間で再開され、東郷は国境線の問題には触れず五月一日以前への原状復帰で停戦するよう提議したが、モロトフはモンゴルの主張する国境線から日本軍は退去すべきだと譲らない。

東郷が「日本軍は満州国領域なるを信じて行動せるものなれば、国境確定前に退去し得ざるは当然なり」とつっぱね、「一時は破裂とさえ思われる程であつた」⁽⁵⁶⁾と回想するのは、このシーンであつたろう。しかし彼は最終譲歩案として、双方とも現在占拠している線で停戦してはと申しでる。

モロトフは考慮したいと返事を保留したが、翌十五日の第四回会議で前日の日本提案を受け入れ、ノモンハン地区における満蒙国境線を確定するため日満およびソ蒙代表から成る混合委員会の設置を取りきめた。双方の占拠線は、ほぼそのまま新国境線として固定される可能性は予見されていた。だがノモンハン周辺の係争地は不利でも、ハンダガヤールシャン方面では日本軍のかけこみ占領地域で埋め合わせがつくので、ソ連側もかなり譲歩したといえよう。それなりの理由はあつた。

ソ連側は第六軍が準備していた攻勢が発動されれば、かなり長期の消耗戦となるのを危ぶんでいた。流動的な東欧情勢、とくにポーランド進駐（九月十七日）、フィンランド侵攻（十一月）に向けての準備が差し迫っていたし、この機をとらえて停戦するメリットを意識していたと思われる。

有力な判断材料となつたのは、九月十三日夜にシュテルンからウオロシロフ国防人民委員へあてた次のような電報

（要旨）⁵⁷⁾ だったろう。

多くの情報を総合すると、日本軍は最近の壊滅的敗北への報復を、いかなる代償を払っても遂行すると決め、近く大攻勢の発動を準備している。すでに2 D、4 D、23 D、7 Dなど四〇五を下らない師団が集結し、9 D、朝鮮からの兵団、特殊部隊、新手の満州国軍も急派されるという情報がある。ハルビンからの情報だと一千門近い砲、一五〇台の戦車、五〇〇機近い飛行機も投入されよう。

ハルハ河東岸のわが防御線は堅固で、ジューコフ軍の損耗はほとんど補充済みだが、さらに第94師団、第37戦車旅団等をザバイカル軍管区から増派（9月16日着予定）。現有三五〇機の戦闘機に加え四八機を増派するが、なお不足なので配慮されたい。

砲と戦車がやや誇大なのを例外として、日本軍の動静をほぼ正確につかんでいたことがわかる。それを背景に、前記の東郷・モロトフ会談で双方が合意したのは、

1 日満軍及ソ蒙軍は九月十六日午前二時（モスクワ時間、満州時間は午前八時）を期し一切の軍事行動を停止す。

2 日満軍及ソ蒙軍は九月十五日午後一時其占め居る線に止まるものとす。

3 （略）

4 双方の捕虜及屍体は交換せらるべく、右に付現地に於ける双方軍代表者は直に相互に協定し実行に着手す。
のような内容であった。

それを受けた大本営は、大陸命第三五七号（九月十六日二三時一〇分）によって、関東軍司令官へ「自今ノモンハン方面（ハンダガヤ付近を含む）に於けるソ蒙軍との戦闘行動を停止すべし」と命令し、四か月にわたったノモンハン事件は名実ともに終結した。

このタイミングとなったことについてクックスは、ポーランド進駐を二日後に控えたソ連は「九月十五日を対日交渉の最終日と決めていたに違いない」⁽⁵⁸⁾と断じ、政戦両略をびったり整合させた手法に感嘆の辞を惜しまない。

その後の経過をざっと展望しておくと、停戦協定成立の翌九月十六日から一週間、ノモンハンの現地で細部の現地交渉が実施され、二十四日から三十日まで日本兵約一千名を動員した作業で、四三八六体の屍体（日本側から引渡したのは二十三体）が収容された。捕虜交換は九月下旬と翌年四月の二次にわたり実施され、日満軍二〇四名（うち満軍四四）、ソ蒙軍八九名の捕虜が交換された。

全長二五六kmに及ぶ国境画定作業は昭和十四年十二月からチタとハルビンで断続的に進行し十六年十月、国境標識の建立が終って調印した。スタッフの一人だった北川四郎は「ノモンハン地区は満州国外交部の調査通りに国境が確定し、一方、ハンダガヤ地区は満州国側のほうがかえって有利に確定された」⁽⁵⁹⁾と総括している。その理由は、独ソ戦の渦中にあつたモスクワが「我方が妥協をなせるは……西部国境に於ける積極的行動の準備に必要」⁽⁶⁰⁾と認識したからであつた。

戦訓と総括

ノモンハン戦を描いた藤田嗣治の戦争画は、戦車に銃剣で立ち向かう日本兵の姿をクローズアップしている。第二

次大戦中に数多くの戦争画を描いたことで批判された藤田が、なぜ速射砲、せめて火炎びんを主役に立てなかったのかと疑問の出るところだが、画家は銃剣という原始的兵器に思いを託したかったのかもしれない。皮肉にもそれは銃剣に象徴される白兵戦への信仰を深めていく日本陸軍の趣好に合致していた。

大きな戦闘や戦争が終ったあとには、得られた教訓を引きだし次の機会に生かそうとする衝動に駆られるのが通例である。ノモンハン戦も、例外ではなかった。

大本営は停戦から二か月後の一九三九年十一月に「ノモンハン事件研究委員会」（委員長は小池竜二大佐、主査は小沼治夫中佐）を編成し、現地調査をふくむ研究討議を重ね翌年一月、成果をまとめて陸軍三長官へ報告書を提出した。⁶¹「戦略戦術及幕僚勤務」「編制装備」「防衛交通通信」「教育」「兵站兵器」などの七篇から構成されているが、身内を裁くことには限界があり、とくに責任に関わる追及は微温的にならざるをえない。

それでも「総説」（第一篇）では、ノモンハン戦の本質を「必勝の信念と旺盛なる攻撃精神」の「精神威力」（日本）と戦車、砲兵、飛行機に代表される「物質威力との白熱的衝突」と定義したうえで、精神力は「物質力に対抗し得ざることあるを認識するの要あり」と踏みこんだ。しかし上層部から反発が出て、最終的には「最大の教訓は国軍伝統の精神威力を益々拡充すると共に、低水準に在る我が火力戦能力を速かに向上せしむるにあり」と当りさわりのない総括でしめくくった。

委員会が発足する直前の十月四日、陸軍省内の課長会議で岩畔軍事課長が「日本軍の装備をソ連なみにしようとしても、八割以上とするのは期待できない。したがって敢闘精神に頼る以外には方途がない」と発言しているあたりから察すると、落し所は最初から決っていたも同然だったのではあるまいか。

いずれにせよ、火力戦能力が短時日に向上するあてはないから、当面は夜間の急襲戦法と白兵戦能力で対抗するしかないとされた。さらにクックス博士は報告書が取りあげなかった日本軍の弱点として兵力の逐次投入、装備改善の遅さ、夜襲への執着、非降伏主義、守勢への嫌悪、航空機による地上支援能力の低さ等を列挙している。

前記の諸指摘のなかで注目すべき論点は装備改善の遅さ、すなわち現場の教訓に即応して次の戦闘に間にあうよう兵器を改良し、ひいては戦法を改変しようと考えない教條的思考だった。

そもそもノモンハン戦に投入された日ソ両軍の装備で、量はともかく質の点では大差はなかった。

あるとすれば須見歩26連隊長が「敵は戦闘中に装備改善を進めつつあり」と気づいたような、ソ連軍の即応能力であつたろう。ソ連軍が持ち、日本軍になかった新兵器はパニック的效果を発揮したとされる火炎放射戦車（ただし出動は37両だけ）と鉄条網のピアノ線ぐらい、その逆はジューコフがユーモア混りでスターリンに報告した携帯用蚊帳^{かや}ぐらいにすぎない。

新兵器どころか、日本軍が一貫して頼りにしたのは制式の装備品リストに入っていない火炎びんだった。第六軍の増援部隊が野重連隊の兵士までサイダーびんを持たされて二〇〇kmを行軍したのは、すでに記した通りである。だが七月三日のハルハ渡河攻撃で火炎びん攻撃に悩まされたソ連軍はすぐに対策をたてた。過熱して引火しやすいラジエター部に金網をかぶせ、燃料をガソリンからディーゼル油に変え、不燃性を高める。

その結果、第二次ノモンハン戦では戦果があがらなくなり、それに気づいた小松原師団長は「サイダー壘を以て肉薄攻撃するも効果なく我軍をして失意せしめたり」（8月22日付）と日記に書いた。「敵の優良戦車現出」と標題をつけたことから、失意のほどが知れる。

対戦車兵器の決め手と目された速射砲も、第十一師団を除く全満の部隊から総動員（集中末期には二三〇門）したが、ソ連軍は射程外から大砲で叩いたり、戦車を死角が生じないよう梯形の集団で前進させるなど対抗策を講じたので、バインツァガン戦の再現は望み薄となる。

日ソ両軍ともたがいには危惧していた化学兵器（毒ガス）と細菌兵器は、限定戦争という性格もあつてか使用は抑止された。それでも石井給水部隊は実験レベルながらホルステン川に細菌を流した形跡がある。⁶³ また関東軍化学部と陸軍習志野学校は昭和十三年八月に制式採用された青酸ガス（じゃ剤）の研究演習をノモンハン戦さなかの十四年八月、チチハルで実施していた。対戦車攻撃用の「ちび弾」は未完成（十六年に実用化）だったが、戦場後方で待機していた迫撃第二連隊によるガス弾の発射は可能だった。演習の日程から推測すると、威嚇効果を狙ったのかもしれない。⁶⁴

A・D・クックスは大本営の戦訓委員会報告書について、「問題の核心というべき軍中央と関東軍の協調の欠如について言及されていなかった⁶⁵」と指摘する。

では言及はなかったにせよ、植田軍司令官から作戦参謀に至る幹部を更迭し、第六軍の攻勢を中止させたことで大本営の権威は回復し協調関係は復元したのか、という疑問に答えるのは簡単ではない。さしあたりはノモンハン戦の後遺現象を、対ソ戦略の流れから拾い出してみるが、まずはノモンハン停戦の直後に起きた攻勢主義と守勢思想をめぐる新たな相剋に注目したい。きっかけは、九月十二日に攻勢作戦の中止を第六軍に伝達した新任の遠藤関東軍参謀副長による問題提起だった。

作戦課育ちの遠藤は日中戦争が解決するまで、ソ連軍との対決は先き延ばしすべきだとの観念から、国境紛争の再

発を予防するばかりでなく、それまでの東満と北満から沿海州・シベリアに打って出る年度作戦計画を変更し、ソ連軍を満州国内で迎え撃つ防勢戦略に切り変えるべきだと主張した。

説得された梅津新軍司令官と飯村新参謀長は賛同したが、有末高級参謀と島村参謀は古巣の大本営作戦課と短絡して遠藤案を拒んだ。梅津は沢田参謀次長―富永恭次第一部長を軸とする中央の圧力に屈し、遠藤は在任半年で更迭された。その過程で富永は「日本軍に防御なし⁶⁶」と言い放ち、沢田からは「関東軍にはノモンハン事件に懲りて恐ソ病に罹っている者があるということではないか⁶⁷」と反問されたと、遠藤は回想する。

対ソ作戦計画が防勢本位へ転換したのは大東亜戦争末期の昭和十九年までおくれるが、十六年夏にはドイツの対ソ開戦に呼応してシベリアへ進攻しようと、大本営は演習（関特演）の名目で約五〇万の大兵力を満州に集中し好機を窺った。好機の解釈は「熟柿派」と「青柿派」に分れたが、ドイツ軍の進撃速度が落ちたことで冬期到来前に作戦終了の見込が薄れたため、八月九日に大本営は対北方武力行使を断念し、対米英戦を覚悟しての南方進出に方向転換する。

その間に関東軍の現地部隊の中には「好機到来せりと為し、場合に依りては事端を醸^{かも}して対蘇攻撃の火蓋を切るべし等の強硬意見」も流れていたらしく、梅津軍司令官から「時期を失する時は独断進取すべきあるを予期する^{あらかじ}。予め承認を乞う⁶⁸」との軍機電報が舞いこんだこともあった。

陸軍がこの時点での対ソ進攻を思いとどまったのはノモンハン事件の敗北コンプレクスだと解説する評言を見かけるが、むしろノモンハンの復讐をと意気こんだと見るのが妥当だろう。しかも動員された兵力だけは多くても、装備の質に向上改善の跡は見られない。「秘密扱いが厳しく、中堅以上の将校でも報告書の内容を知らない者が多く、普

及しにくかった」⁽⁶⁹⁾となれば、せつかくのノモンハン戦訓が生かされる機会はなかったと断定できそうだ。

ひるがえって、ソ連軍がノモンハンの戦訓をどう攝取し評価したかにも触れておきたいが、当時の公式文書は、スターリン独裁体制を反映してか「社会主義の絶対的勝利」とか「偉大なるレーニン・スターリン同志の教育を受け……」（ジュコフ公式報告書）式の巧言、美辞が多く、本音の部分はつかみにくい。それでも、ソ連歩兵は概して自立して戦う個人的技能が不足していることは認めている。

翌年五月にスターリンと会ったジュコフは、砲兵と戦車は日本軍に比べ優れていたが、日本軍の歩兵は白兵戦に優れ、とくに彼らの操典と矛盾はしているが防御戦闘が得意だと評した。この観察が正しいとすれば、防御とくに専守防御の教育訓練をほとんど受けていなかったのが日本軍の欠陥だと指摘した小沼中佐は、実態を見誤っていたことになる。

もっともソ連側が自軍歩兵の能力が低いと認めているのに、日本側参戦者の多くが八倍のプリズム眼鏡付き小銃を操るソ連歩兵の狙撃能力を高く評価していたから、誤認はおたがいさまと言えなくもない。

戦史家のヴォルコゴノフ将軍はノモンハン戦の戦訓資料を集めたのに参謀本部が死蔵したため、フィンランド戦や独ソ戦への対応を誤ったと強調している。⁽⁷⁰⁾シュテルンが集めた戦史資料と報告書の作成に協力せず葬ってしまったのはジュコフだとの批判がのちに現れたのは、この件を指しているのかもしれない。⁽⁷¹⁾そうだとすると、期せずして日ソ両軍の上層部はいずれも戦訓の直視を嫌ったことになる。

ノモンハンの勝利でスターリンに寵愛され一年半後には参謀総長へ登用されたジュコフでさえ、すべての献言を採用されたわけではなかった。とくに彼がノモンハン戦で実証した戦車集団の独立使用は一時否定され、歩兵直協用

法に逆戻りしてしまい、独ソ戦の初期にドイツの戦車軍団に敗北する一因となった。スペイン内戦の戦訓と競合したためともされる。⁽⁷²⁾

ノモンハン事件に対する諸論評を見渡して、私は「(関東軍の) 勇み足と火遊びのような冒険主義」(半藤一利)と「太平洋戦争の縮冊版であった」(五味川純平)という短かい論評が、総括にふさわしいと感じている。

注

- (1) 『西園寺公と政局』第八卷、五二―五三ページ
- (2) 畑侍従武官長日誌、8月23日の項
- (3) 西浦進『昭和戦争史の証言』(原書房、一九八〇) 一二二ページ
- (4) 細谷千博「三国同盟と日ソ中立条約」(『太平洋戦争への道』、朝日新聞社、一九六三) 一五九―六〇ページ
- (5) たとえば筆者不明(松岡洋右か)「事変を迅速且つ有利に終熄せしむべき方途」と題した七月十九日付の意見書(陽明文庫蔵、義井博『増補日独伊三国同盟と日米関係』、南窓社、一九八七、に収録)は、かなり早い時点で四国連合構想を説いた。
- (6) 『西園寺公と政局』第八卷、六六―六七ページ
- (7) 三宅正樹『スターリン、ヒトラーと日ソ独伊連合構想』(朝日新聞社、二〇〇七) 七八―七九ページ
- (8) 関東軍機密作戦日誌、九〇、一二三―三四ページ
- (9) 同右、八〇―八一、一二二ページ
- (10) 欧亜局一課『日ソ交渉史』(巖南堂、一九六九) 五一九―二〇ページ

- (11) 関参一電四六八号（大本営研究班「関東軍に関する機密作戦日誌抜粋」三二二ページ）
- (12) 前掲『日ソ外交史』五二〇ページ
- (13) 前掲三宅、六九ページ
- (14) A・D・クックス『ノモンハン』上、一七二ページ
- (15) 井本熊男メモ
- (16) 稲田正純「ソ連極東軍との対決」（『別冊知性』昭和31年12月）
- (17) 前掲「大本営研究班」、三七ページ
- (18) 浜田寿栄雄「ノモンハン事件回想録」（一九六〇、防研蔵）
- (19) 全文は「石蘭支隊陣中日誌」（靖国偕行文庫蔵）に収録
- (20) 前掲「大本営研究班」三八ページの8月26日関東軍司令官発参謀総長宛関参一電五七二号
- (21) 8月29日着の関東軍参謀長発次長・次官宛関参一電五八八号
- (22) 前掲「関東軍機密作戦日誌」九三ページ
- (23) 前掲西浦、八八ページ
- (24) 前掲稲田
- (25) 『昭和史の天皇29』の稲田正純談（三五四ページ）
- (26) 「中島鉄蔵中将回想録」（昭和15年、参謀本部の竹田宮恒徳王少佐による聴取、防衛研究所蔵）
- (27) 辻政信『ノモンハン』（亜東書房、一九五〇）一二二―一二三ページ
- (28) 前掲「大本営研究班」四九ページ
- (29) 前掲『昭和史の天皇29』の稲田談（三五七―五八ページ）
- (30) 今岡豊（参本作戦課）日誌、九月七日（防衛研究所蔵）
- (31) 前掲「中島鉄蔵中将回想録」

- (32) 前掲稲田談(三五八ページ)
- (33) 前掲「大本営研究班」
- (34) 九月六日陸軍大臣発関東軍司令官宛(前掲「関東軍機密作戦日誌」、一四六ページ)
- (35) 同右、一四七ページ
- (36) 大本営が関東軍へ第五、第十四師団、野重二個連隊、速射砲九個中隊(五四門)、兵站自動車二十五個中隊などの増援を内示したのは八月二十九日で、逐次大陸命で発令された。第十四師団(在華北)の満州派遣が発令されたのは九月五日(大陸命三五五号)である。
- (37) 畑勇三郎日誌、九月二日の項
- (38) 小松原日誌、九月五日の項から引用した。なおこの軍司令官訓示はソ蒙軍が九月八日、九七七高地をめぐる戦闘で片山支隊の戦死者から入手して東京裁判に提出され、判決文にも引用された。速記録の日本訳は「ネズミ退治」、英訳は *rat stirring* となっている。
- (39) 本郷健「ノモンハン回想記」(『ノモンハン』6号、一九七二)
- (40) 九月六日第六軍司令官発関東軍参謀長宛(前掲「関東軍機密作戦日誌」一四七ページ)
- (41) 宮崎繁三郎「歩兵第16連隊奮戦す」(『丸』一二三号、一九五八年)、なお秦郁彦「明暗のノモンハン戦秘史(下)」——宮崎連隊と深野大隊の勇戦」(『昭和史の謎を追う』第十章)を参照。
- (42) ソ蒙側から見たエルス山の戦闘についてはプレブドルジ中将「九月戦闘についての問題点」(『ノモンハン・ハルハ河戦争』、原書房、一九九二)を参照。なお、この戦闘の日付について九月八〜九日説(宮崎回想記、戦史叢書)と七〜八日説(第二師団行動詳報)の両説が混在しているが、戦死者公報の日付から後者が正しいと判定する。
- (43) 前掲プレブドルジ論文、ハルハ山の攻防戦については前掲秦、第十章を参照。
- (44) たとえば死傷者二三人を出した歩二七連隊田原大隊による七五八高地の戦闘(8月29〜30日、9月10日)は前掲秦、第九章「見捨てられた田原大隊」を参照。

- (45) 前掲辻、二二七—一九ページ
- (46) 『参謀次長沢田茂回想録』（芙蓉書房、一九八二）一二七—三〇ページ
- (47) 八月二十七日の日ジュニコフ指令（ノヴィコフ、一一九ページ）
- (48) 『第七師団戦闘詳報』（防衛研究所蔵）9月5日の項
- (49) 歩29の『郷土部隊戦記(2)』（福島民友新聞社、一九六五）三九ページ
- (50) 歩57の『佐倉連隊回顧』（一九九六）六七ページ
- (51) 『岡部直三郎日記』（『国学院大学日本文化研究所紀要』99号、二〇〇七年）、昭和14年8月1日の項
- (52) 島田英常「地図は語る—ノモンハンNo.23」（『地図中心』二〇一〇年二月号）
- (53) 井本熊男『支那事变作戦日誌』（芙蓉書房出版、一九九八）三八五ページ
- (54) この関東軍命令の原文は見つかっていないが、九月十日一一五〇関東軍参謀長発参謀次長宛関参一電七七一号として戦史叢書未定稿の二三七—三八ページに全文が記載されている。
- (55) 遠藤三郎『日中十五年戦争と私』（日中書林、一九七四）一七五ページ
- (56) 東郷茂徳『時代の一面』（改造社、一九五二）一二九ページ。交渉経過については前掲『日ソ交渉史』を参照。
- (57) 三浦信行他「日露の史料で読み解く〈ノモンハン事件〉の一面」（『国士舘大学アジア・日本研究センター紀要』二〇一〇年）に電報の原文と邦訳を記載（八一—八二ページ）
- (58) 前掲クックス下、二四二ページ
- (59) 北川四郎『ノモンハン』（徳間書店、一九七九）一〇ページ。なお満州国外交部調査は、昭和十二年に北川も加わって実施したもので、ほぼソ蒙側の主張する国境線と同じだった。
- (60) 一九四〇年六月十四日付外務人民委員部発駐日ソ連大使あて電報（外交史料館記録「日ソ中立条約一件」）
- (61) 防衛研究所には、小沼中佐が寄贈した「ノモンハン事件研究報告」（昭和15年1月10日）が所蔵されている。
- (62) 前掲クックス下、三四〇ページ

- (63) 詳細は前掲秦『昭和史の謎を追う(上)』の第21、22章「日本の細菌戦」を参照。
- (64) 青酸ガスとチビ弾については秦『昭和史の秘話を追う』(PHP研究所、二〇一二)の第六章「秘密兵器、チビ弾」の喜劇風生涯」を参照。チチハルの毒ガス演習については、『陸軍習志野学校』(一九八七)、「満密大日記」(昭15―3、No.4)を参照。
- (65) 前掲クックス、三六一ページ
- (66) 宮武剛『將軍の遺書―遠藤三郎日記』(毎日新聞社、一九八六) 一三二ページ
- (67) 前掲遠藤、一八〇ページ
- (68) 詳細は前掲秦『昭和史の謎を追う(上)』の「第十三章関特演」を参照。
- (69) 『偕行』二〇〇九年九月号の原剛論文
- (70) 前掲ヴォルコゴノフ、一五五ページ
- (71) 産経新聞二〇〇四年九月二日号のノボプラネツ大佐(シュテルンの後方参謀)論文
- (72) D・M・グランツ『独ソ戦全史』(学研M文庫、二〇〇五) 五〇ページ